

興亜会報告

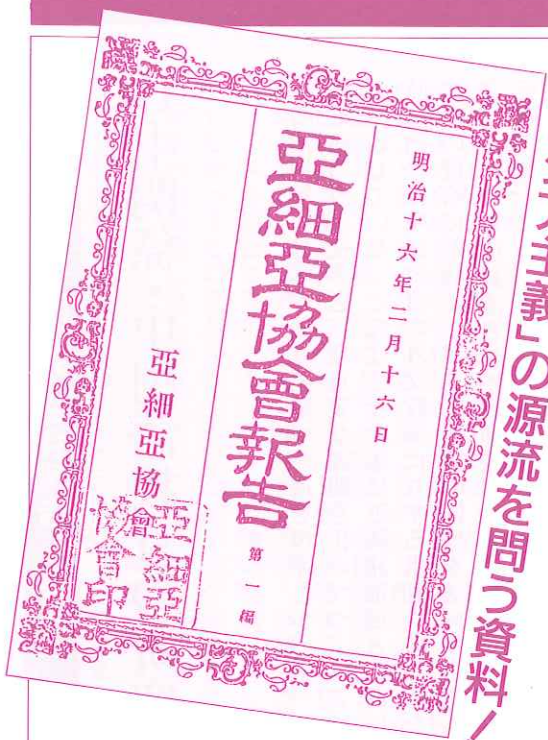
復刻版・全2巻

亞細亞協會報告

不二出版

黒木 彬文
鱒澤 彰夫
共編・解説

「アジア主義」の源流を問う資料!



●復刻の辞——明治初期、日本の近代化の過程には欧米列強に対抗するため、アジア諸国の事情収集、特に言語の習得が急務であった。興亜会は明治一三年(一八八〇)成立、自由民権運動の影響の下、日本で最初の「アジア主義」組織であった。明治一六年(一八八三)には亜細亞協會と改名し、やがて明治三三年(一九〇〇)に東亜同文会に吸収合併された。

興亜会の中心には渡辺洪基・曾根俊虎がおり、会員は政府関係者、「朝野新聞」関係者、自由党・非土佐派、華族等により構成され、会報の発行、例会、通信員の派遣のほか、興亜会支那語学校の経営などがなされた。特に支那語学校の出身者には、善隣書院を創設した宮島大八、などがいた。

弊社では、アジア主義の源流ともいふべき興亜会(亜細亞協會)の毎月一回の『会報』を、永年の調査を通じて収集しうる全てを復刻刊行する。同時に会の規則類、会員名簿、会発行の証明書、および明治一九年伊藤博文あての曾根俊虎意見も付した。

日本近代史とくに日中関係史および日朝関係史・また中国語教育史等の基本資料として、詳細な「解説」を付し復刻刊行する。

不二出版

●概要——A4判・上製本・4面付方式・総650頁【'93年9月刊】

●価格——全2巻 本体価格160,000円(定価17,000円)

日中関係・中国語教育の研究に貴重な基本資料

伊東 昭雄 (横浜市立大学教授)

明治初年、日本が独立国家への道を模索しつつあった時、日本政府は欧米諸国との不平等条約の改正交渉という重要な課題を担いつつ、一方では台湾・朝鮮・琉球への膨脹政策を開始していた。このような政策は近隣諸地域との間にさまざまな摩擦を生じており、当時国内には明治政府の外交政策に対する批判をも含みながら、日清提携を軸として、欧米諸国の侵略に対抗するアジア諸国の同盟を志向するグループが存在した。それが一八八〇(明治一三)年に結成された興亜会(後に亜細亞協会と改称)であった。この会については近年研究がしだいに進められているが、会員の職業・身分や思想もまちまちで、きわめて複雑な要素をはらんでおり、そのことが研究を困難にしている。

いま一つ興亜会(亜細亞協会)研究を困難にしていた条件として、機関誌『興亜会報告』、『亜細亞協会報告』全巻の閲覧が容易でなかったことがあげられる。このたび出版される復刻版『興亜会報告』、『亜細亞協会報告』は、これまでに発見された関連資料全ての復刻版であり、本書の出版によって、これまで閲覧が困難だった資料の閲覧が可能となり、この方面の研究が一段と進むことが大いに期待できる。

本書の解説にも明らかにされているように、興亜会の主要な活動の一つに興亜会支那語学校の経営がある。この学校はあまり長続きはしなかったが、宮島大八・小田切万寿之助等日関係において重要な役割を果たした人物を世に出しており、わが国における中国語・朝鮮語教育の基礎を築くのに一定の役割を果たしている。したがって本書の刊行は中国語・朝鮮語教育の歴史を研究するためにも貴重な資料である。

このたびこのような重要な意義をもつ基本的資料が黒木・鱗澤両氏の周到な解説を付けて世に出ることは私にとっても大きな喜びであり、一日も早く本書を手に入れることができるのを、ひたすら待ち望んでいる。

日本近代史と中国語教育史研究に必備の史料

波多野太郎 (文学博士・横浜市立大学名誉教授)

明治の初期、日本のとった歴史的過程の真実を偏ることなく実事求是(前漢書)的に把握し、また支那語に対する研究教育の立脚点や実態を客観的に正しく認識するのに、本文献は貴重無比。例せば廣部精の『亜細亞言語集』、中田敬義の『続散語串珠』を始めとし、御幡雅文、宮島大八、足立忠八郎等のものした支那語の書物は、本文献記載の当時の日本民族の歴史的営みから離れて考察することはできない。その後下永憲次が『北京俗語児童』や『北京語集解』を著し、伊沢修二が『日清字音鑑』を編んだ背景が認識せられる。伊沢

という人物も決して公式的史観では捕えられない。外国人の中国語研究が竟いには宗教活動から離れて純粋な学問研究に脱化する過程と軌を一にするものがある。更に中国語教育史上、張滋坊、鄭永寧、龔恩長等中国人の業績が解明せられるし、教育史上、南京官話と北京官話とのウェートの問題も明白になるし、東京外国語学校支那語科の初期の歴史も明白にされるのでその価値は絶大。

早大文学部非常勤講師鱗澤彰夫氏と筆者との出会いは、実に奇なるものがある。氏は筆者が早大の大学院や文学部中文の講義をした時の学生ではなかったが、神田は神保町界隈の書店や古書展では毎週といつてよく顔を合わせ、古屋昭弘教授もその篤学振りを激賞した。古書展では獲物を見せ合い、互いに喜びを分かち、判らぬことは会場で見ながら質問を受けることもある。最近貴重な獲物『燕京婦語』を公刊し、書評は筑波大学の犬塚秀明教授も担当される。なお、早大研究大会で氏が発表した際、途中で口を差挟むといった浪速の寄席や四川の劇場さながらのような間柄で、忘年の友といったところ。前途多望な学者。その筆者に語る声は、嘗てのニコライ堂の鐘のように筆者の胸に永く鳴り渡るもの敢てこれを江湖に薦める所以。

明治前期、日本民族の自画像に迫りうる資料

松本三之介 (東京大学名誉教授・駿河台大学教授)

日本思想史の世界では、「方法としてのアジア」ということがよく言われる。とくに明治維新以降、日本とアジア(主として中国・朝鮮)との間には、親和と反発、連帯と蔑視の入り混じった、きわめて屈折した関係が見られた。したがって日本がアジアをどのようなものとして捉え、どのような姿勢でアジアと接しようとしたかを知ることは、ただ単に日本のアジア認識の問題としての意味をもつだけでなく、じつは日本自身の自己認識のあり方を探るうえにも大変有意義な方法といえることができる。言うならば、そのときどきの日本のアジア観は、いわば民族としての日本の実像を映し出す鏡としての意味をもつ。

福澤諭吉が「脱亜」を唱え、岡倉天心が「アジアは一つ」と説いたことは、何かにつけて話題になるが、同じくアジア対ヨーロッパという枠組みの下で、「興亜」を唱え、アジア諸国との交流と連帯を指向した興亜会とその後身の亜細亞協会については、あまり注目されることなく今日に至っている。しかし、興亜会には長岡護美・伊達宗城のような華族、渡辺洪基・宮島誠一郎のような官僚、曾根俊虎のような軍人、末広重恭・草間時福のような民権派言論人、その他副島種臣・榎本武揚など、じつにさまざまな人物が参加している。このことは、「興亜」のシンボルが、当時、多様な階層や立場を貫いて、それぞれそのニユアンスを微妙に異にししながら、ある種の吸引力をもっていたことを物語るものであろう。したがってこの興亜会の活動記録を手がかりとしながら、明治前期の日本の各層が描いた民族の自画像に迫る試みもまた可能になるはずである。このたび興亜会・亜細亞協会の関係資料が、黒木彬文・鱗澤彰夫両氏の綿密な解説を付けて復刻出版されることになった。まことに有意義な企てであり、その実現を心から喜ぶものである。

明治十三年三月廿四日

興亜公報 第一輯



明治十三年三月九日午後第三時神田錦町學習院ニ於テ第一會同ヲ開ク會長長岡護美氏事故アリテ不參ナルヲ以テ鍋島直大君會長ニ代リ祝詞ヲ述ラン次テ副會長渡邊洪基氏立會ノ主旨ヲ演フ次テ幹事草間時福氏本會創立ノ歴史ヲ朗讀ス幹事曾根俊虎氏ハ本日支那欽差大臣何如璋君ノ要務アリテ來會ナキヲ告ケ併セテ氏が會ヲ何如璋氏ヲ訪ヒタルト同氏カ頗ル興亜會ノ設立ヲ喜ヒタル事由ヲ演ブ此ヨリ會員各演說ヲ爲シ柳原前光氏ハ亞細亞交際ノ往時ニ盛ニシテ今時ニ衰エタル事述テ演述シ中村正直氏ハ本會ノ設立ヲ賀スル五言古詩長篇ヲ朗讀シ重野安綱氏ハ支那語學ノ要用ナルヲ述ベ宮島誠一郎氏ハ日支ノ交際親密ナラサル可カラサルヲ演ヘ興亞發教師張滋坊氏又演說シ幹事金子彌兵衛氏之ヲ口譯ス右終リテ副會長渡邊洪基氏衆員ニ向ヒ會事ノ終ルヲ告グ會員各茶菓ヲ喫シテ退散ス午時午後第五時ナリ

- 相會スル會員ハ
- | | | |
|---------|--------------|---------|
| 渡邊 洪基 | 曾根 俊虎 | 金子 彌兵衛 |
| 草間 時福 | 佐藤 暢 | 宮崎 駿兒 |
| 櫻村 清徳 | 前田 獻吉 | 小牧 昌業 |
| 長井 政夫 | 荒木 卓爾 | 杉本 愷雲 |
| 白尾 景行 | 何如璋代理 鈺鹿 勳太郎 | 廣 部 精 |
| 田付 景行 | 小森 澤長政 | 鄭 永 寧 |
| 宮島 誠一郎 | 本 田 親 雄 | 鍋島 直大 |
| 山 吉 盛 義 | 池 田 謙 藏 | 高橋 由一代理 |
| 三島 通庸代理 | 池 田 謙 藏 | 野 本 氏 治 |
| 赤 谷 信 敏 | 鈴 木 謙 諄 | 北 澤 正 誠 |
| 恒 屋 盛 服 | 柳 原 前 光 | 板 垣 政 徳 |
| 大久保 利和 | 森 下 岩 楠 | 石 黒 磐 |
| 下 間 繼 旦 | | |

- 箕野吉次郎代理 松平 忠禮
- 横尾 一郎
- 以上創立員
- | | | |
|-------------|-----------|-----------|
| 吉田 晚 稼 | 黒 岡 帶 刀 | 有馬純行代 |
| 海 賀 直 常 | 末 弘 熊 五 郎 | 高 島 龜 太 郎 |
| 赤 松 則 良 | 重 野 安 綱 | 矢 口 定 親 |
| 佐 藤 甫 | 高 橋 基 一 | 田 代 離 三 |
| 中 村 正 直 | 武 藤 平 學 | 近 藤 眞 琴 |
| 山 吉 盛 義 代 理 | 梅 田 義 信 | 星 野 重 次 郎 |
| 石 田 常 直 | 丸 山 孝 一 郎 | 大 草 孝 暢 |
- 以上同盟員

興亜會創立ノ歴史

方今亞細亞大洲ノ藝靡衰頽スルニ際シテ協同戮力之レヲ興起振作スル其人ナキテ慨キ曾根俊虎明治十年ノ春ヲ以テ清國ヨリ歸ルノ日之レヲ東次郎前田獻吉等ニ謀ル衆皆并躍此ノ舉ノ欠ク可カラサルヲ説キ共ニ力ヲ尽キャントス依テ假ニ一社ヲ設ケ名ケテ振亞社ト云フ是レ此ノ興亜會ノ興ル以所ナリ當時聞ク者皆之レヲ意トセス荏苒昨冬ニ至ル偶々金子彌兵衛氏清國ヨリ歸ル氏素ト曾根氏ト藍交アルモノ方今亞細亞ヲ振興スル唯合從ノ一策アル緣由ヲ述ヘ頗ル振亞社ノ舉ヲ賛成ス又是ヨリ先キ曾根氏學校ヲ設ケ諸有志ヲ招集シ支那語學ヲ授ケント欲セリ金子氏亦此ノ舉ヲ以テ合從ノ策ヲ實施スルノ初歩ナリトス於是曾根氏自ラ長岡護美渡邊洪基佐藤暢ノ三氏ニ謀ル三氏亦頗ル亞細亞ノ頹靡ヲ歎スル者ナルヲ以テ大ニ此舉ヲ賛成シ共ニ盡力ス

●興亜会発行の機関誌『興亜会報告』は、創刊号のみ誌名が『興亜公報』となつています。右の影印は、その冒頭の部分です。

興亜会報告・亜細亜協会報告 全2巻

●復刻版概要——A4判・上製本・4面付方式・総650頁・中性紙使用

●内 容——第1巻『興亜会報告』第1集(明13・3)↓第35集(明15・12) + 解説①②

第2巻『亜細亜協会報告』第1篇(明16・2)↓第18篇(明18・9)、明治19年第1～5篇
+ 規則類・会員名簿・会発行証明書等収録

●解 説——(1)「興亜会・亜細亜協会の活動と思想」黒木彬文(九州大学法学部講師)

(2)「興亜会の中国語教育」鱒澤彰夫(早稲田大学文学部非常勤講師)

●推 薦 人——伊東昭雄・波多野太郎・松本三之介

●価 格——全2巻本体価格56,000円(定価57,980円)

●関連図書(編集復刻版及び復刻版)のご案内

波多野太郎 編・解題 **中国語学資料叢刊 全5篇**
各篇——全4巻
各篇本体価95,000円

波多野太郎 編・解題 **中国文学語学資料集成 全5篇**
各篇——全4巻
各篇本体価75,000円

波多野太郎 編・解題 **中国語文資料彙刊 全5篇**
各篇——全4巻
各篇本体価88,000円

六角 恒廣 編・解題 **中国語教本類集成 全5集**
各集——全4巻
各集本体価85,000円

林 正明 主宰
明治9～16年刊 **近事評論・扶桑新誌 全11巻・別冊1**
解説||水野公寿
揃本体価180,000円

本カタログ中の表示価格は、全て消費税を含んでおりません。

※弊社は注文制です。お近くの書店へご注文ください。

〒113 東京都文京区向丘一丁目二二
TEL 03-3812-4433
FAX 03-3812-4464
振替 へ東京 六一九四〇八四